

新しい学力観や、高校・大学の教育内容、大学入学者選抜の評価方法などを国民も考え、意識を共有することが重要

海城中学高等学校 教頭 中田 大成 先生



中田大成先生

高校では、達成度テストや中央教育審議会の議論について、どのように感じているのだろうか。国際バカロレア（IB）日本アドバイザー委員会の委員でもあった海城中学高等学校教頭の中田大成先生に話を聞いた。

知識獲得型から課題設定・解決型へ 新しい学力観に対する意識の共有が重要

——大学入学者選抜が大きく変わろうとしていることに対して、どのようなご意見でしょうか。

新しい入学者選抜が求められるようになった背景には、日本が置かれている環境の変化があります。グローバル化の進行とともに、国内では成熟社会が到来する中で、さまざまな課題が山積しています。これまでは欧米のキャッチアップをしていれば、課題が解決できたかもしれませんが、例えば、少子高齢化は世界で最も早く進行するなど、日本が初めて直面する課題も少なくありません。つまり、キャッチアップではなく、自ら解決策を見出す力が求められるわけです。そうした環境の変化に対応できる人材を育成するためには、新しい学力観や、高校・大学の教育内容、大学入試の評価方法などを、国民全体が真剣に考え、意識を共有することが大切です。

幸い、ここ数年で、「知識獲得型から課題設定・解決型へ」「内容知から活用知へ」「近代型能力からポスト近代型能力へ」や「21世紀スキル」など、表現はさまざまですが、新しい学力・能力が必要だという認識は一気に広まったと感じます。海城学園では、20年以上前から、新しい学力観に基づく教育を展開してきましたが、これまで、なかなか理解してもらえない面もありました。それがここ数年で大きく変化しており、共通認識が得やすい状況が生まれていると思います。

IBのディプロマを参考にすれば 新しい学力も十分に測定可能

——先生は新しい学力とはどのようなものだと考えていますか。もう少し詳しくご紹介ください。

従来の学力は、知識獲得型、知識を記憶することが重要な学力でした。教科書に象徴される体系的な知識をまずは正確

に覚えて、必要に応じて素早くアウトプットできる力です。それに対して、本校では「自ら課題を設定する力」「情報を収集・分析し、深く考える力」「唯一無二の解がないかもしれない中で、価値選択する力」「周囲にわかりやすく表現する力」を、新しい学力と位置づけています。それに加えて、独創性や創造性、およびその基盤となる批判的な思考力も重要になると考えています。

——そうした新しい学力はテストで測れるのでしょうか。

教育学者・ブルームのタクソノミー（教育目標分類表）によると、人間の学力には「知識」「理解」「応用」「分析」「総合」「評価（自己決定）」の6段階があるとされています<図表>。日本の従来の中等教育では、この6段階のうち、カリキュラム化されているのは「分析」の途中段階までで、残りは個々の教員の力量に依存して、いわば暗黙知として教えられているだけでした。カリキュラム化されていないわけですから、その能力を測ることもしていませんでした。しかし、課題設定・解決型の学力には、まさに残された「総合」「評価（自己決定）」の力が不可欠になります。

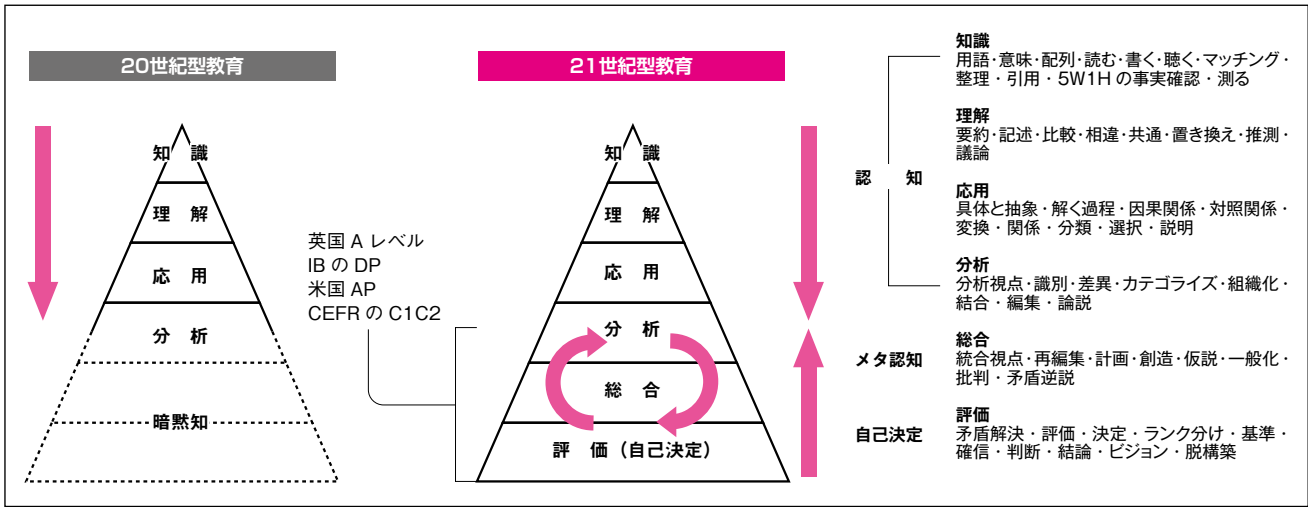
その能力は測れないという先入観があるようですが、世界では、すでにこの部分の能力をきちんと測定している試験や区分している規格も存在しています。イギリスのGCEのAレベル、IBのディプロマ^(注)、アメリカのAP（Advanced Placement）、CEFR（英語のコミュニケーション能力のレベルを示す国際標準規格）の最高レベルであるC1・C2などです。私が特に注目しているのがIBのディプロマであり、この仕組みを参考にすれば、新しい学力も十分に測定可能だと考えています。

——IBのディプロマの仕組みを教えてください。

IBのディプロマの評価は、教育目標設定や教育内容

(注) IBディプロマ・プログラム（DP）とは、国際バカロレア機構（IBO）によって提供されている教育プログラムのことであり、16歳～19歳までを対象で、合格すると世界各国で認められている大学入学資格を得られる最終試験があるプログラムである。DPのカリキュラムは、「言語と文学」「言語習得」など6つのグループにより構成されており、ディプロマ資格を取得するためには、上級レベル又は標準レベルとして、合計6科目を2年間履修する。

<図表> 21世紀型教育とブルーム型「認知タキソノミー」



(本間勇人氏作成・中田先生提供)

と密接な関係があります。細かい「評価基準表」(criteria)があり、何を学ばなければならないのか、どのような観点で評価されるのかなどを、教員と生徒、およびIB機構の試験官が共有しています。

また、IBの評価には、統一テストの成績だけでなく、各学校での学習成果に対する評価も組み込まれます。もちろん、そうした成果物に対する評価表も用意されており、細かく基準が明示されています。それでも、甘い評価の教員、厳しい評価の教員がいて、教員による評価の違いが生じるのではないかと考える向きもあるでしょう。IBではそれを防ぐために適切化 (moderation) を行っています。教員が評価したレポートやプレゼンテーションなどの一部を、IB機構に届け出ることを義務づけており、それを確認することで、評価の統一化を図っているのです。

「日本語DP」「SGH」などがモデルに

—こういった取り組みを実施するには日本の高校教育全体が変わっていく必要がありますね。

IBが優れている点は、試験だけではなく、高校の教育プログラムと連動していることです。ですから、日本では、学習指導要領が重要になります。従来の知識獲得型の観点ではなく、生徒が何をできるようにするのかというアウトカムベースの方向で整備し、さらに、教員と生徒、高校と大学とで共有することが大切です。とはいえ、学習指導要領の改訂だけでは難しい面もあるでしょう。

というのも、新しい学力の必要性は20年以上前から提言されています。実際に育成する場として「総合的な学習の時間」が導入されましたが、授業内容が明確でなかったため、「総合的な学習の時間」がうまく活用できていないのが現状でしょう。

しかし、別の期待できる動きも出てきています。例えば、「IB認定校200校計画」や「スーパーグローバルハイスクール (SGH) 事業」などです。後者においては、グローバルな社会課題を発見・解決できる力の養成をめざしています。そうした学校の取り組みや成果が、高校教育変革のモデルの役割を果たすことが期待されます。

課題設定・解決能力や共生力などを養う多彩なプログラムを用意

—海城学園では、新しい学力、新しい人間力を先取りした教育を展開しています。いくつか特徴的な取り組みを紹介してください。

中3の「社会科総合学習」では、自分でテーマを設定して調べて、ディスカッションして考えを深めて、自分なりの解決策をまとめて、原稿用紙30枚以上の論文を仕上げます。取材を義務づけている点が特色です。というのも、生の情報を核にすることが重要だからです。しかも、夏休みの自由研究のような、生徒に内容を任せているプログラムではありません。中1から現地取材を伴う調べ学習を行い、毎学期レポートにまとめて提出します。最初は7～8枚のレポートを課し、少しずつ枚数を増やしていく、教員の指導の下、内容を積み重ねていく

学習になっています。

中1・2では「プロジェクトアドベンチャー」を実施しています。生徒たちはグループごとにさまざまなアクティビティに取り組みます。例えば丸太の上にメンバーがまずはランダムに並び、次に①丸太から降りない、②一切言葉を発しないという条件の下、片方の端から生年月日順に並び直すという活動です。活動後、振り返り、気づきの時間を設けますが、その際、生徒たちは体格の違いなど、それぞれの特性をうまく引き出しあって並び直したことを思い出し、仲間と協働することの大切さに気づきます。また、言葉を使わなくても意思が疎通できることを知るとともに、その裏返しとして言葉の便利さにも気づき、言葉を学ぶ重要性を再認識するようになります。

中2の「ドラマエデュケーション」の授業では、延べ50名を超えるさまざまな職業・経歴の大人たちに来校していただき、その方々の人生で最も印象的な場面を語ってもらいます。数名の生徒のグループでそれを聞き書きして、シナリオを作り、演じるのですが、同じ話を聞いたはずなのに、生徒1人ひとりの思い描くシーンは異なります。まずはそうした異質性に気づくことが大切です。続いて異質なイメージのすり合わせをしてシナリオを作成する過程が、まさに対話的コミュニケーションの基本

になるのです。中3では、プロの演劇人による指導もあり、生徒たちは創造する楽しさにも目覚め、よりクリエイティブな作品を作ろうという意欲を高めます。創造性や独創性が飛躍的に向上し、それが他教科の学習におけるプレゼンテーションの際にもよい影響を与えています。

今後はさらに、リベラルアーツを重視しようとしています。グローバル化に伴いビジネスのスピードが速まるなか、素早く高度な価値判断を下すには、ぶれない評価軸と大局観を持つことも重要ですが、実はその基盤となるのがリベラルアーツだと私は考えています。2年前にグローバル教育部を発足させましたが、そこではリベラルアーツ教育の推進も行っています。すでに放課後講習・夏期講習の一部で、ガロアを統一テーマにして学ぶ数学リレー講座や、英語と理科、数学と理科の融合講座などを実施しています。

——**高校現場でも、さまざまな教育の工夫が要求されるようになっていきそうですね。**

新しい大学入学者選抜が1つの契機となって、高校教育の質的転換が図られることが理想です。いろいろな困難が予想されていますが、それでも、新しい学力を評価する方向へ進む大学が増え、高校・大学双方の教育を変えていくことが、日本が進むべき方向だと、私は考えています。